



中病だより

題字 岩成 治 / 表紙写真 西中国県立中央病院会議の一場面



取組紹介

◇病棟薬剤業務への取り組み 2

取組紹介

◇医療技術局放射線技術科の紹介 3

取組紹介

◇シリーズ『技術のデパート』検査技術科 part1 4

取組紹介

◇がん放射線療法看護認定看護師を
取得しました 6

取組紹介

◇「がんパスって知ってる?-地域で支える
がん治療計画-」 7

取組紹介

◇「治療ってななに?-当院での治療推進
を考える-」 8

取組紹介

◇皆さん、こんにちは スタッフ支援室です。 ... 9

取組紹介

◇出雲空港航空機事故消火救難訓練に出動 ... 10

お知らせ

◇しまねっこ来院 12

お知らせ

◇外来診療一覧表 12

編集後記

～表紙写真～

島根県立中央病院、県立広島病院、山口県立総合医療センターの3県立病院では、災害医療、教育研修、臨床評価指標の共同研究等を目的として協力協定を締結しています。

毎年、3県立病院で情報交換する場を持ち、相互協力内容について話し合うこととしています。今年度は当院を会場として、活発な情報交換が行われました。(平成26年10月9日開催)

～～ 病棟薬剤業務への取り組み ～～

薬剤局 臨床薬剤科長 横手克樹、薬剤主任 島田杏子

薬剤師の仕事は、病院の片隅の調剤室でひたすら調剤——それはもう一昔前の姿です。医療の高度化に伴い「チーム医療」が重要になる中で、薬剤師もチームの一員として積極的に薬物療法に関わることが求められています。当院薬剤局も病棟薬剤業務には力を入れており、各病棟に1人～3人程度の専任薬剤師を配置し、病棟薬剤業務を行っています（兼任含む）。

病棟での主な業務を紹介します。

①常用薬確認

入院患者さんの中には、もともと何らかの疾患を持ち毎日薬を飲んでいる方がかなりおられます。いつものお薬＝【常用薬】を把握することは治療の上で大変重要です。薬やお薬手帳などの持ち込みがあれば内容を鑑別し、詳細が分からない時はかかりつけの医療機関に問い合わせることもあります。常用薬がない患者さんに対しても、市販薬や健康食品も含めた服用習慣を確認します。

ワルファリンやアスピリンなど血液凝固を阻止する作用のある薬や血糖降下薬は、手術や処置、絶食前に休薬が必要となる場合がありますが、鑑別した薬の中にこれらの薬がある時は報告書で注意喚起しています。

②薬歴・処方内容確認

担当する患者さんの処方内容を確認し、妥当性を評価します。内容に疑義があれば医師に照会しています。昨年12月より、疑義照会后、修正することになった処方について、患者さんへ与えるリスクが高くないものに関しては薬剤師が修正、削除、中止を行っています。患者さんに適したきめ細かい処方調整を行えることや医師の業務負担の軽減にも繋がることで、好評を得ています。

③患者面談、服薬指導

入院患者さんと面談し、説明文書などを用いて処方薬の内容や飲み方を説明したり薬による副作用が出ていないかをチェックしたり

します。

特に抗がん薬や抗凝固薬などのリスクの高い薬については重点的に説明を行い、副作用の早期発見に努めています。

④相談応需と情報提供

薬の使い方や投与量、相互作用や配合変化など、病棟スタッフから質問されることも少なくありません。医薬品情報管理室（DI）と連携して薬に関する情報を提供しています。

⑤回診・カンファレンスへの参加

病棟での回診・カンファレンスや感染制御チーム（ICT）、栄養サポートチーム（NST）などの院内チームに参加しています。患者さんの情報を収集するとともに、薬学的な視点から薬剤師もディスカッションに加わっています。



病棟スタッフとディスカッション

薬剤師が病棟に常駐することにより、些細な疑問でも気軽に相談できる環境があることは、薬剤による医療事故を未然に防ぐことにも繋がるのではないのでしょうか。

医師とも看護師とも違う「薬学的」な視点で、患者さんのために適切な薬物治療を推進するよう努力していきたいと思っています。

医療技術局 放射線技術科の紹介

医療技術局 放射線技術科 診療放射線主任 曾田卓実

従来より「放射線」は、医療をはじめとし、あらゆる産業で利用されてきました。そして今なお各分野でその応用技術は進歩しています。その急速な進歩はめざましく、毎年驚かされるような高度な技術が開発され発表されます。

そんな「放射線」を利用した業務に就いているのが私たち診療放射線技師です。日常より質の高い医療画像を提供することに力を注いでいますが、そこでは放射線利用のみでなく、磁場・高周波を利用するものもあります。

また、「放射線」は画像構築（検査）のみならず、より高エネルギーの放射線を用いることで放射線治療の分野でも大きく医療に貢献しています。

今回は、私たち診療放射線技師の当院での業務内容を簡単に紹介させていただきます。

放射線技術科は診療放射線技師30名と医療アシスタント1名で構成されます。その他異動により保健所に5名の診療放射線技師が配置されています。このメンバーで実員数より多い数の各種装置を駆使し、毎年以下のような数の検査を実施しています。

一般撮影検査(TV検査含む)	約65,000件/年
CT検査	約25,000件/年
MRI検査	約8,500件/年
血管撮影検査(心カテ含む)	約2,000件/年
核医学検査	約2,000件/年
放射線治療	約8,000件/年

「放射線」を安全かつ有効に取り扱うために私たちは以下の4つに大きく分けて考えます。

◆放射線管理部門

管理部門では写真のような放射線量測定器を用いて空間線量等を把握し、患者さん・スタッフにとって安心安全な環境作りを徹底しています。

また、原発事故発生時等に必要な、緊急被ばく医療においても、放射線に関する知識を生かし、その体制整備等にも協力しています。



放射線量測定器の例

◆放射線臨床部門

臨床は、一般撮影、CT検査、MRI検査、血管撮影、核医学検査、放射線治療、救急業務など多岐にわたります。各部門の詳細は次号からの「中病だより」にて紹介しますが、皆が常に良質な医療を意識しながら業務に取り組んでいます。また、救急業務については、救命救急センターからの依頼に24時間体制で対応し、夜間業務（宿直対応）では一晩で30件以上の依頼を受けることもあります。



放射線検査機器の例

◆その他

これまでに挙げたような業務をより良質に、より効率的に進めていくために、私たち

は日頃から自己研鑽にも努めています。

学会、研修会、勉強会等に積極的に参加し、座長や発表演者として対外的にも活動すると共に、他施設との交流を深め、最新の情報・技術の意見交換の機会を増やすように心掛けています。

◆保健所

島根県には7つの医療圏域があり、その各圏域に保健所が所在しています。そこで私たち診療放射線技師は、医療を司る医療法を扱ったり、はたまた、地域での完結型医療を目指す地域医療計画作成に携わったりと、病院内とは全く異なった業務をこなすこととなります。しかし、違った側面から自分の仕事を客観的に見るができる機会であり、そこで得た知識は病院業務を遂行する中で、非常に有用であるということに気付

きます。

～～最後に～～

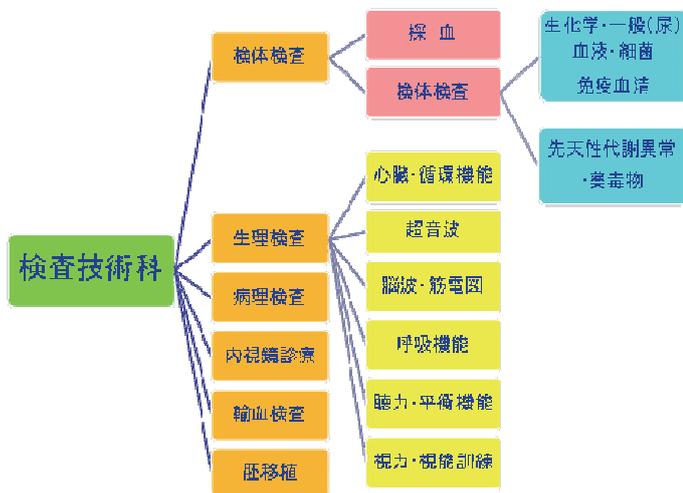
医療の高度化により一つずつの分野において、より専門的な知識・技術が求められるようになってきました。この現状にスマートに対応できるよう、これからも個人を高め、いつも思いやりを胸に、「全ては患者さんのために」という気持ちを大切に業務にあたりたいと思います。放射線技術科を今後ともよろしく願います。



～～ シリーズ『技術のデパート』検査技術科 part1 ～～

医療技術局 検査技術科長 石岡秀子

今回よりシリーズで検査技術科を紹介します。まずは検査技術科全体についてです。



検査技術科には臨床検査技師33名、視能訓練士2名が在籍しています。その中で35歳以下が半数を占め、世代交代が進んでいます。

検査技術科は図に示すように、大きく分けて、検体検査、生理検査、病理検査、内視鏡検査、輸血検査、胚移植の部門に別れ、更にそれぞれ専門の業務を担当しています。胚移植や薬毒物検査等の特殊検査は、複数の技師が他の検査と兼務して行っています。

外来採血室は、1階と2階の2か所あり、看護師と協力しながら業務を行っています。検体検査の多くは、LSIメディエンスという会社に委託し、院内で実施しています。血液学的検査、生化学的検査、免疫学的検査、一般検体検査、微生物学的検査等を担当しています。



検体検査室の様子

生理検査では、心電図検査、動脈硬化を調べる検査、心臓・腹部・乳腺・甲状腺・血管などの各種超音波検査、脳波・筋電図検査、呼吸機能検査、聴力やめまいの検査など多くの検査を行っています。また、視力検査をはじめとする様々な視機能の検査や視能訓練を視能訓練士が行っています。

病理検査では、体の様々な組織や細胞を標本にし、顕微鏡で見ます。たくさんの細胞の形・大きさ・色などからがんなどの悪性細胞を探し、病名を推定し診断します。

内視鏡診療とは、胃や大腸や気管支などをカメラ（内視鏡）を使って検査や治療をすることを言いますが、その介助や使用する機器の管理を臨床検査技師が行っています。

輸血検査では、血液型や安全で適正な輸血を行うための検査をしています。輸血前には患者さんと血液製剤の適合性を検査します。更に日本赤十字血液センターから供給される血液製剤の適正な保管管理を行っています。



輸血検査室の様子

胚移植とは、不妊治療のひとつで、卵子と精子の授精を体外で行い、培養して順調に分割した卵（胚）を子宮内にもどすことを言います。当院の臨床検査技師は、2000年よりこの治療に関わっています。

それぞれの部門において、学会認定の資格取得、学会や研修会の積極的な参加や発表等により、検査のレベルアップに努め、良質な医療を提供しています。

現在、細胞検査士や認定輸血検査技師、超音波検査士など、15種類、延べ33資格を取得しています。また、多くの技師が、糖尿病療養指導士、血管診療技師、認定病理検査技師等、種々の資格取得を目指して日夜努力しています。



超音波検査室の様子（イメージ）

さらに、検体検査、輸血検査は日当直体制をとり、365日24時間対応しています。

内視鏡検査、脳外科手術でのモニタリング、急性胆嚢炎の緊急処置、病理解剖などは、待機呼び出しの体制を整え、夜間休日においても緊急対応しています。

また、脳死下臓器提供の際にも脳波や病理検査室、輸血血液管理室の多くの技師が関わります。

生命の誕生前である受精の段階から死後の病理解剖まで、多岐にわたりそれぞれの部署で、私たち臨床検査技師、視能訓練士は専門的な知識と技術を発揮し、医療に貢献しています。まさに『技術のデパート』です。

次回からはそれぞれの部門の業務内容を詳しく紹介していきます。

～～ がん放射線療法看護認定看護師を取得しました ～～

看護局 中央診療看護科 副看護師長 和田優子



(イメージ)

私は、2014年7月に、がん放射線療法看護認定看護師の資格を島根県第1号として取得しました。

当院は、2008年に放射線治療機器の更新と、放射線治療専門医の配置があり、これらを機に看護師も配置されました。当初は放射線治療室での看護経験がなかったため、実際の治療や研修などを通して自己学習をしました。

そして、放射線治療の特徴や看護の根拠などが理解できるようになると、治療に対する不安や疑問など患者さんの思いに、より関心を向けられるようになりました。放射線治療を受ける患者さんの多くはがんであり、治療の目的や方法も幅広く、副作用を伴うことが多くあります。また、患者さんは目に見えない放射線そのものへの漠然とした不安や恐怖感、治療環境や体位による不安や苦痛を抱きやすいといわれます。実際に「何をされるのかイメージできない」「副作用はどの程度で、いつまで続くのか」「家族への被ばくは大丈夫か」といった声を聞きました。また、「治療できることをありがたいと思う」「仕事だと思って頑張っている」「ここに来て話をすると気持ちが安らぐ」といった前向き言葉も聞きました。私は、このように様々な思いを抱えながら治療を受ける患者さんたちと接する中で、治療室看護師の必

要性や役割を認識するようになり、日進月歩する放射線治療と今後がん患者が増える状況の中で、放射線治療看護に高い専門性が求められることを強く感じました。

そこで、私は意を決して家族を説得し、2013年6月から、久留米大学認定看護師教育センターにおいて半年間の研修を受講しました。がん放射線療法看護分野は10名のクラスで、同じ志をもつ仲間と過ごした半年間はとても有意義な経験となりました。

放射線治療は、患者さんとご家族が治療について理解し前向きに取り組みながら、苦痛や不安を最小限に治療完遂することが目標です。そのために、治療過程に対応したアセスメントをし、意思決定支援や副作用へのケアなど、個別的、全人的な看護実践が求められます。治療室看護師は、治療開始前のオリエンテーションにおいて、患者さんの緊張をほぐし、わかりやすく説明・指導するよう心がけています。治療中は、和やかで安心できる治療環境の提供に努め、体調の変化や思いを傾聴し、治療継続意思を支えています。私は、がん放射線治療看護認定看護師の活動として、このような治療室看護実践をしながら、院内外を含めた島根県内の放射線治療看護の質の向上に貢献したいと考えます。

現在は、院内の部署別勉強会やがん看護研修を通じた看護師への教育や、治療中の患者さんへのケアについて看護師からの相談への対応をしています。今後は、治療中の患者さんだけでなく、治療を決める前の不安や、治療が終了した後の身体症状や不安などについて、患者さんやご家族、または地域の医療機関等からの相談を受け、必要な情報提供、意思決定支援、治療後のサポートをしていきたいと思えます。私は、このような実践・指導・相談という認定看護師の活動を通して、患者さんやご家族、院内外の看護師や他職種とのつながりを大切にし、認定看護師としての役割が果たせるよう努力していきたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。

～～ 「がんパスって知ってる？-地域で支えるがん治療計画-」 ～～

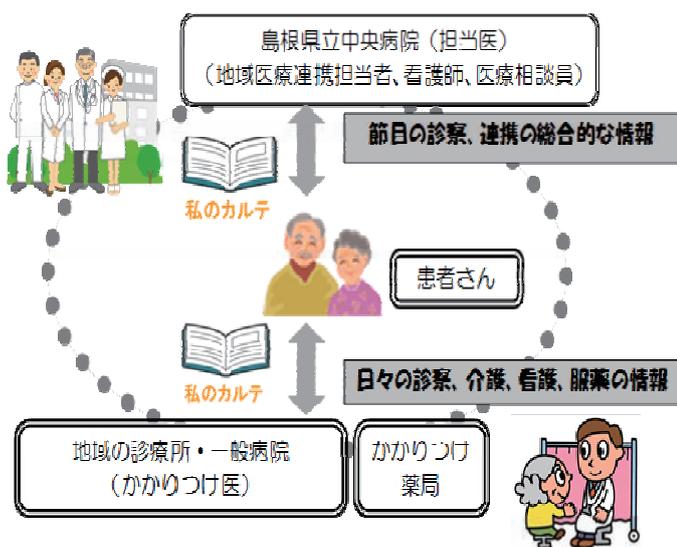
医療支援室 看護師長 石飛美智江、室長 岩成 治

医療支援室は、院内の様々なチームを職員に紹介して顔の見える関係を作り、病院全体のよりよいチーム医療を目指すことを目的に「チーム医療推進ワークショップ」（以下ワークショップ）に取り組んでいます。平成25年2月から開始し、今年9月で11回開催しました。

【がん地域連携パス】

チーム医療推進ワークショップ第10回（平成26年7月）は「がん地域連携パス」（以下地域連携パス）をテーマに、地域連携パスの仕組みとがんパスワーキングメンバーの役割について発表がありました。

「地域連携パス」とは、患者さんのこれからの治療を地域の医療機関（かかりつけ医）と基幹病院の専門医が治療計画を共有し、2人の主治医体制で診療を行う仕組みです。普段の通院はかかりつけ医で行い、節目の診察や専門的な検査は基幹病院で行うものです。地域連携パスは、胃、大腸、肺、乳腺、肝の5種類あり、当院では平成23年7月から運用開始し平成26年7月の3年間で約350人の方に適用されています。



当院と地域医療機関との連携

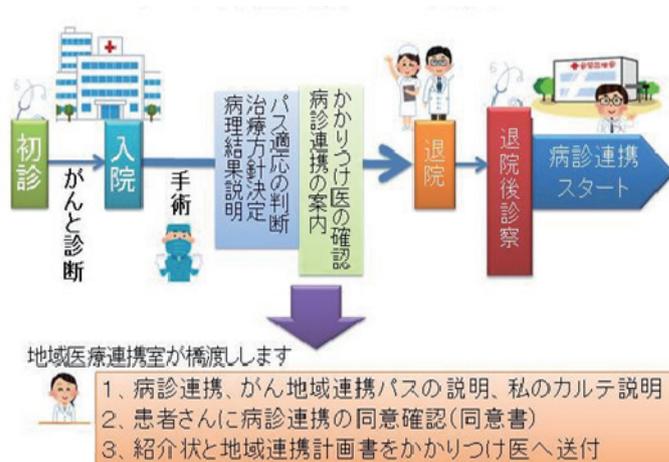
当院のがんパスワーキングは医師、看護師、薬剤師、医療事務、医療秘書で構成して

います。「地域連携パス」が患者さんにとって安心できる仕組みであるために、毎月協議を行い、運用の工夫と院内外の連携を図っています。

医師は診察と共同計画書の作成、看護師は地域連携パスの説明と「私のカルテ」の使用方法的説明を行います。地域医療連携室ではかかりつけ医との調整を行い、薬剤師は患者さんへの薬剤指導だけでなく、かかりつけ薬局との情報共有を積極的に行っています。医療秘書はデータ管理を行い、事務はかかりつけ医の登録手続きを行います。

このように、患者さんが安心して地域連携パス利用できるよう切れ目のない連携をしていることがわかりました。今年度からは、患者さんへのよりわかりやすい説明のために、県内統一の「地域連携パス説明用DVD」の活用が開始となりました。そのDVDの制作には地域の医療機関（医院、薬局）と当院が深くかかわることが出来、患者さんに「わかりやすい」と好評です。

ワークショップに参加した職員からは、「様々な職種が関わっており、それぞれがどのような役割を担っているか理解出来た」「DVD、各職種の方からの具体的な説明があって分かりやすかった」「こういう機会がなければ知ることができない情報なので良い機会だと思う」など感想が寄せられました。



がん地域連携パスの流れ

「治験ってなあに？-当院での治験推進を考える-」

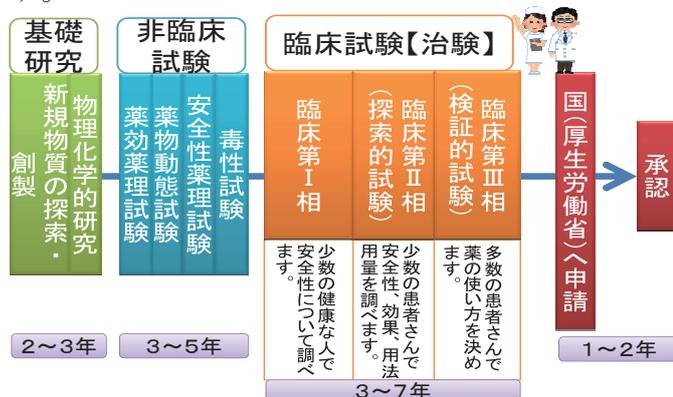
医療支援室 看護師長 石飛美智江、室長 岩成 治

チーム医療推進ワークショップ第11回（平成26年9月1日）は「治験」をテーマに行いました。

「治験」とは、“薬の候補”が“薬”として国から承認を受けるために、人での有効性や安全性を調べるための臨床試験のことです。

今まで当院では馴染みが少なく、なんだか謎に包まれていた「治験」の仕組みや、当院のサポート体制について、治験実施支援機関（SOM: Site Management Organization）の会社の方と臨床研究・治験推進チームからの発表がありました。

医薬品が厚生労働省の承認を受けるためのプロセスには、基礎研究・非臨床試験を経て、「治験」と呼ばれる臨床第Ⅰ相～Ⅲ相の臨床試験が必要です。第Ⅰ相は健康な人で安全性を調べ、第Ⅱ相は少数の患者さんで安全性、効果、用量用法を調べます。第Ⅲ相では多数の患者さんで効果や安全性を最終的に調べて標準的な使い方を決めます。病院で行う「治験」は第Ⅱ相、第Ⅲ相ということになりますが、臨床試験には3～7年を要し、薬として承認されるまでさらに1～2年を要すそうです。



薬誕生までのプロセス

「治験実施支援機関」は医療機関での業務の一部を代行し、治験事務局の設置や運営、手順書の作成、患者さんへの説明と同意の取得、モニタリングと監査、報告書の作成など、医師へのサポートを行います。その実務

は看護師や薬剤師、臨床検査技師など医療資格を持つ治験コーディネーター（CRC）が担当し、被験者である患者さんへの丁寧な説明と対応を含め、治験開始前から終了まで業務支援を行います。

当院には「臨床研究・治験推進チーム」と「臨床研究・治験サポートワーキング」があり、外部CRCと連携してサポートを行っています。このチーム、ワーキングは医師、薬剤師、看護師、検査技師、事務、統合物流管理、医療秘書で構成し、院内の調整を行っています。「臨床研究・治験推進チーム」は、実施計画、同意説明文書などについて倫理的、科学的な問題はないか確認するなど、審査前の事前確認、審査委員会の時の支援を行います。「臨床研究・治験サポートワーキング」は各部署の相談窓口となってサポートを行います。

この様に、当院での「治験」は準備から実施、報告まで、患者さんにとっても職員にとっても安心できる体制になっていることがわかりました。

ワークショップの参加者からは、「治験の現場を基礎から学べた」「医薬品が承認されるまでの仕組みがよくわかった」「業務に役立てたい」と感想が寄せられ、「治験」について理解を深めることが出来ました。



治験サポートメンバー

院内には様々なチームがあり、それぞれよりよい医療を目指して活動しています。また、院外からの力を借りて大きなチームとして成立する医療も沢山あります。チーム医療推進ワークショップでは、お互いの活動目的や内容を理解し、協働を推進する一助となるよう、今後も継続して行いたいと思います。

～～ 皆さん、こんにちは スタッフ支援室です。 ～～

スタッフ支援室 曾田美佐子、塩野悦子

皆さん、こんにちは。スタッフ支援室（S-café）です。スタッフ支援室が開設され半年が過ぎました。今日は現状をということで報告をします。

今までに20名の育休者の訪問と、院内職員では40名の悩み相談がありました。お気軽訪問も合わせれば、1日平均5～6名の方が訪問してくださっています。

現在働いている方からは、「職場内の悩み特に時間外を減らすにはどうしたらいいのか」、「精神的な悩みを抱えるスタッフへの関わりをどうしたらいいのか」といった相談が多いのかなと感じます。皆さんがそれぞれの立場で、どうしたら働きやすくなるか、働き続けられる職場を作るにはどうしたらよいかを考えていくことが大切だと感じています。

また、育児休業から復帰を考えている方からは、制度のことや、働き方についての相談が多くあります。

ここで、スタッフ支援室がお手伝いしている仕事を少し紹介します。

8月22日、ワーク・ライフ・バランスチームの方達と計画したママナス会が開催され、24名の育休参加者がありました。実際に時短や部分休業などの制度を使っている方から体験談を話してもらったり、助産師さんから育児の相談についての具体的なアドバイスをいただいたりしました。参加された方からは「交流の場となってよかった」「参考になった」などの意見が聞かれました。次回は、



ママナス会の一場面

10月24日に計画していますが、今後も定期的な開催ができればと思います。

また11月から育休復帰対策の一つとして、フリーアドレスナース（フリアドナース）の運用が始まります。いわゆる“病棟勤務”ではない新しい業務形態です。3年間育休を取ることのできる方々の中から、予定より早くに復帰をしていただけるとの申し出もあり嬉しい限りです。働き方の選択肢が増えることで、「仕事、家庭、育児をどうしていけばいいのか・・・」と悩んでいた“新米ママさん看護師”にとって、復帰へのハードルが低くなることを期待しています。



相談対応のイメージ

ところで、このスタッフ支援室は、昨年度末に看護師長さん達が集まり、現状の問題と改善提案を考えた中で、職員が働き続ける職場作りのために「職員が気軽に悩みの相談ができる場所が必要」との声から誕生しました。

微力ではありますが、悩みを一緒に考えたり、アイデアを持ち寄り関係部署と連携を取ったりと、草の根的な活動として頑張っています。どなたでも気軽に訪問ください。笑顔でお迎え致します。そして日頃感じていることを話したり、まどろんだりしてみてください。きっとまた違った感覚で仕事ができるようになるかもですよ。お待ちしております！

相談日： 毎週火曜日・金曜日

相談時間： 9：30 ～ 16：30

連絡先： PHS 7641

E-mail： s-cafe@spch.izumo.shimane.jp



出雲空港航空機事故消火救難訓練に出動

事務局 総務課 主任 吉田直哉

食欲の秋、スポーツの秋と色々な秋がありますが、DMAT (Disaster Medical Assistance Team: 災害医療支援チーム) にとっては「訓練の秋」でもあります。災害医療の訓練は、例年9月～11月の秋に集中しているのですが、そんな中から身近な出雲縁結び空港での消火救難訓練の様子を紹介します。



よくご存じの出雲空港には、大きい機体で約270人の乗員・乗客が乗れるものもあります。安全とは言われていますが、事故が起こる可能性は0ではないです。もし一気に270人ものが人が発生したら。。。基幹災害拠点病院である中央病院は、きちんと備えておく必要があります。そんな出雲空港で航空機事故が発生した場合、当院の役割は大きく次の2つになります。

- ①多数の傷病者を受け入れる
- ②災害現場での傷病者対応

まず①の多数傷病者の受入についてですが、もしも松江・出雲・雲南に各々分散して傷病者が搬送されたとしても、当院には20～30人が短時間で搬送されてくることになります。とても日常の救急体制では対応できませんので、病院全体で対応することになります。院内の災害訓練等に参加し、知識やスキルを高めることが非常に重要になります。

次に②の災害現場での傷病者対応です。当院にはDMATが組織されていますので、DMAT隊員が院外での災害に対応することになります。

DMATの活動の前に、出雲空港で航空機事故が発生した場合、事故発生～収束までどのようになるかを簡単に紹介します。

1) 事故発生のお知らせ

まずは応援を呼びます。事故・災害の基本です。

2) 初期消火

空港に常駐している消防車で消火活動を行います。



3) 救護所設置

消火活動と並行して、救護所が設置されます。



4) 空港閉鎖

他の航空機が離着陸できなくなります。事故現場には進入禁止ということです。

5) 2次消火

地元や近隣地域の消防機関が消火活動をおこないます。



6) 救出活動

消防機関や消防団により消火活動と並行して救出活動が行われます。



7) 救護活動

救出された傷病者に救護活動を行います。



簡単に紹介しましたが、DMATは主に7番目の救護活動に携わります。

皆さんは災害医療と聞いて何を想像されるのでしょうか? 「トリアージでしょ」「野戦病院みたいにそこら中で処置するのでは?」

「自衛隊のへりに乗るんでしょ?」こんな答えを良く聞きます。

災害医療の基本で「C S C A T T T」という語呂合わせがあるのをご存じの方もいると思います。多くの方は「災害医療」と聞くと「T T T」を想像されます。ここでいうT T Tは次のことを指します。

- Comand& Control : 指揮系統の構築
- Safety : 安全確保
- Communication : 通信手段の確保
- Assessment : 評価
- Triage : トリアージ
- Treatment : 治療
- Transport : 搬送

災害現場では、人員・機材・薬品に限りがあり、傷病者(特に赤の傷病者)の根治は難しいです。

そのため、「重症度の高い傷病者から治療するためトリアージを行い、病院に收容されるまで耐えられるように治療を行い、順次搬

送を行う」というのが災害医療の基本となります。

今回の航空機事故消火救難訓練でも、この考え方に則し活動を行いました。

(手順1) 状態観察、バイタル測定を行い重症度を判断します。



(手順2) 病院までの搬送に耐えられるよう治療を行います。



(手順3) 最も重症な傷病者から搬送します。



写真を見ても分かるように、床の上での処置や、他病院・他機関と一緒に活動など、日々の病院業務とはひと味違う活動を行うため、訓練の積み重ねであったり、他病院・他機関との日頃のコミュニケーションがとても重要になります。当院が重要ミッションに掲げる災害医療を遂行するため、これからもDMAT隊員は積極的に訓練や研修会に参加していきます。

しまねっこ来院

当院でイベント開催した、乳がんについての正しい知識を普及啓発する「ピンクリボンキャンペーン」に合わせ、「ゆるキャラグランプリ2014」の選挙活動にしまねっこが来院しました。

ゆるキャラグランプリの結果は、皆さんの応援のおかげで7位でした。

みんな応援してくれて
ありがとにゃ！



外来診療表【 一般（初診）】

平成26年12月1日時点

診療科	月		火		水		木		金	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
総合診療科	○		○		○		○		○	
精神神経科	○		○		○		○		○	
神経内科	○		○		○		○		○	
呼吸器科										
消化器科	○		○		○		○		○	
循環器科	○		○		○		○		○	
リウマチ・アレルギー科	○			○	○	○			○	
血液腫瘍科	○				○		○		○	
内分泌代謝科	○		○		○		○		○	
外科	○		○		○		○		○	
乳腺科	○		○		○					
整形外科	○		○		○		○		○	
脳神経外科	○		○		○		○		○	
呼吸器外科					○				○	
心臓血管外科	○				○				○	
泌尿器科	○		○				○		○	
小児外科		週不定								
腎臓科	○		○				○			
形成外科		○			○				○	
皮膚科	○		○		○		○		○	
眼科	○		○		○		○		○	
耳鼻咽喉科	○		○				○			
歯科口腔外科	○		○		○		○		○	
小児科	○		○		○		○		○	
産婦人科	○		○		○		○		○	

◆編集後記◆ 朝夕がめっきり冷え込む季節になりました。そろそろ物置から暖房器具を出して冬支度を始められた方もいらっしゃると思います。今年もあとわずかとなりましたが、体調に気を付けて元気に過ごしたいものです。【Y・S】